

調査報告書

- 1 とき：2011年10月22
 - 2 行先：岐阜県郡上市白鳥町石徹白の小水力発電
 - 3 参加者：わしの恵子、田口一登、
 - 4 主な内容
 - ・ 東海自治体問題研究所が募ったエコツアーに参加し、岐阜県郡上市白鳥町石徹白を訪れ、小水力発電を視察しました。
 - ・ 石徹白は、岐阜県と福井県の県境に位置し、国道から標高950mの峠とスキー場を越えた最奥にある集落です。かつては白山信仰の拠点として栄えていましたが、昭和30年代には1200人を数えた人口が、現在では300人を切っているそうです。地区内唯一の石徹白小学校は、全校児童が12人と存亡の危機にあり、「30年後も石徹白小学校を残そう」を合言葉に、様々な地域づくり活動が取り組まれています。その一つが、小水力発電だそうです。
 - ・ 私たちを小水力発電に案内してくれたのは、「NPO法人やすらぎの里いとしろ」理事長の久保田政則さんでした。最初に見学したのは、農業用水路に設置された「らせん型水車」。関市の橋梁メーカーが開発したのですが、電気制御は、電気関係の仕事に携わっていた久保田理事長による手作りです。「部品はインターネットで購入した」と話していました。この「らせん型水車」は、落ち葉などのごみが詰りにくく、2009年6月に連続運転を開始して以来、ほとんどトラブルもないそうです。この水車で発電された電気は、隣接した「NPO法人やすらぎの里いとしろ」の事務所に送られて利用されています。
 - ・ 次に見学したのは、今年の3月に設置された上掛け水車です。発電した電気は、隣接する農産物加工所に送られます。加工所の電気代の負担を下げることと同時に、特産品開発を行い、加工所を稼働させるという地域起しと一体にとりくまれています。
- 視察して感じたことは、水水力発電づくりも日常的な管理も地元の人たちが行っており、水車が地域住民に近い存在であるということです。また、「昨年は水車の視察に約500人訪れた」と久保田理事長が話していましたが、石徹白の知名度を上げることに貢献しているようです。今後の課題について久保田理事長は、「小水力発電を増やし、地区内に街灯を設置して、その電気

を賄うようにしたい」と語っていました。

- 石徹白の「らせん型水車」は、流量が多く、落差が50cm以上あれば導入できるそうですが、問題は河川の水利権。石徹白で水車が設置された農業用水路は、普通河川から水を取っており、新規に水利権を取得する必要はなかったそうです。名古屋市内で小水力発電を導入する上では、水利権がネックとならず、設置可能な水路はどこか、だれが設置して管理するのが課題となると思いました。